

地域のアートプロジェクトへの学生参加の取り組みに関する実践報告 2

A practical report on approach of students participation in project in a community setting 2

中田 稔*

Minoru NAKATA

1 はじめに

本稿は、平成 24 年度の同一テーマでの研究に基づき、その実践を継続し、さらに課題解決の方向について考察したものである。とまた、これらの活動

平成 24 年度の実践では、学生サークル「みまさかアートプロジェクト (MAP)」の学生を中心に、アースワーク部と連携して、「おかやま県民文化祭地域フェスティバル」に参加し、奈義町山の駅と美作市湯郷温泉で、それぞれ地域の特色を生かしたアートプロジェクトに取り組んだ。

これらの実践を通して、参加学生の地域の芸術活動に対する意識は格段に高まり、より地域の特色を生かした活動の展開を期待したり、アートを通じた地域住民との交流を求めたりしている状況が、事後に行なった意識調査の結果により確認できた。また、文化系サークルの連携という点でも、アースワーク部との連携による展示など、一応の成果を見ることができた。しかし一方で、前述の意識調査では、地域の芸術活動に興味はあっても、積極的に参加しようとする学生の数は少数であるとの結果も出た。そして、その要因としては、地域の芸術活動に対する認識の不足が大きいと考えられた。

折しも平成 25 年度は、津山市で「おかやま県民文化祭 (メインフェスティバル及び地域フェスティバル)」が開催され、地域フェスティバルでは、本学をサブ会場にして「アートと食、子ども、福祉」を関連させた取り組みが行われることになった。このことは、学生の目に触れやすいところで地域の芸術文化活動が開催されることであり、これらの活動の認知度を高める上では、またとない機会となった。

そこで前年度と同様に、地域の芸術活動への参加意欲の向上と参加学生の増加を図るために、(1)サークルの人材確保の

ための取り組み、(2)文化系サークルの連携、(3)制作方法や活動内容の工夫、(4)地域の芸術関連情報の提供、の 4 点を取り組みの核として実践を進めることとした。

2 人材確保の失敗

地域の芸術文化活動に関わる最も有力なサークルである「みまさかアートプロジェクト (MAP)」は、平成 25 年度 4 月で部員数約 10 名、その全てが 4 年生という活動困難な状況に陥っていた。4 月以降辛うじて 1 年生 1 名の入部があったものの、このような部員数や学年構成では、活動は愚かサークルの存続さえ危ぶまれる状況となった。そこで、部員確保のための方策として、「現代アート体験ツアー」を筆者とサークル合同で企画し、学内に告知した。制作は無理でも、美術鑑賞やアートに興味や関心を持っている学生は少なからずいるはずで、そのような潜在的な学生を発掘し、そこからサークルへの参加を促そうとする企画である。

丁度、大原美術館 (岡山県倉敷市) で「コレクションテーマ展 37 名品たちの現代 (コンテンポラリー) 展」という展覧会が行われていたので、日帰りの鑑賞ツアーを企画した。しかし、学生たちの学内のポスター掲示等での呼びかけや、筆者の受け持ち授業内での告知も空しく、サークル外からの参加者を一人も集めることができなかった。結局サークル員 4 人のみの参加になってしまい、人材確保のための企画は失敗に終わった。その後も継続的に部員の勧誘には努めたが、新たな人材を獲得することはできなかった。

3 サークル連携の困難さと打開策

平成 24 年度は、「奈義町山の駅アートプロジェクト」の実

* 美作大学短期大学部幼児教育学科准教授

践において、僅かながら MAP とアースワーク部との連携が生まれた。会場内の池のほとりに置かれた LED 照明は、MAP の学生が設置したが、それを載せる陶器の器は、アースワーク部の学生が制作した。アースワーク部員の当日参加者は 1 名しかいなかったが、役割を分担しての連携という点で、一定の成果は上がった。

しかし、前述したように MAP の学年構成に偏りが見られたこと等から、サークル自体の日常活動が停滞するとともに、アースワーク部をはじめ、他のサークルとの連携は困難となってしまう。そのような中、「おかやま県民文化祭地域フェスティバル」が、本学の学園祭（白梅祭）の時期に、本学キャンパスをサブ会場に行なわれることが決まった。

本来なら MAP が、サークルの特色を発揮して地域貢献するチャンスではあったが、就職活動中の 4 年生主体の集団には荷が重い。そこで、MAP とともに平成 25 年度から筆者が顧問を兼任することになった、児童文化研究部の学生に打診をした。児童文化研究部は、児童学科の学生を中心にしたサークルで、部員数は毎年 50～60 人を有している。主に子ども会や子育て支援事業、幼稚園、小学校等の依頼を受けて、子どもを対象としたレクリエーション活動を行なっているサークルである。学園祭でも、野外ステージでの子ども向け演劇の発表とともに、校舎内でも子どもを対象とした企画を毎年提供している。本企画を打診するにあたり、児童文化研究部本来の、子どもを対象とした活動を変更することなく、そこにアートの要素を取り入れたワークショップ形式の企画にすることを提案した。

この提案は受け入れられ、学生との協議を進める中で、ブラックライトを活用して空間を演出し、非日常的な空間の中で、子どもたちがわくわくするような活動を行うことが決まった。

4 学園祭での制作、活動内容

平成 25 年 9 月 28 日から 10 月 20 日まで津山市を会場に開催された「おかやま県民文化祭地域フェスティバル 美つくりの里 旅するアート 2013」の事業として、学園祭期間中の 2 日間(10 月 13,14 日)、美作大学キャンパス内で 2 つのイベントが行なわれた。1 つは、学生たちによるカフェであり、もう 1 つが児童文化研究部によるワークショップである。

このワークショップのテーマは、「光の国にふしぎな木をつくらう」とし、ブラックライトを用いた、子どもを対象とした企画とした。

1 つの教室に暗幕を張って薄暗い空間を作り、天井の蛍光灯 10 数機を全てブラックライトに取り替えた。ブラックライトとは、「波長の長い紫外線を発する蛍光灯」¹⁾で、「鉱石、証明書類の鑑定、捕虫、蛍光物質を利用した装飾などに用いる」²⁾特殊なライトである。そして、この部屋に予め蛍光塗料で着色したミツマタの木を 2 本設置した。この木にブラックライトを当てることで、暗闇で幻想的に光り、訪れた子どもたちに「ふしぎな木」をイメージさせることにした。そして、もう 1 つの部屋に用意された黒い紙片に、蛍光絵の具や蛍光ペンで、不思議な木を飾るための思い思いの絵や字をかき、再度「ふしぎな木」のもとに行って、自らの手でかいた紙片を飾るという活動を行った。



(写真 1) ワークショップ前の設置状況



(写真 2) ワークショップ終盤の「ふしぎな木」

2日間の期間中、附属幼稚園の園児やその保護者、近隣の小学生等を中心に延べ200名以上の来場者があり、「光の国」の演出は大好評であった。普段多くの子ども会等での活動を経験している児童文化研究部の学生たちも、ここまで大掛かりな演出の経験はなかったので、子どもたちの笑顔や歓声を目の当たりにして、本活動（の成果を実感したようであった）。

この期間、「おかやま県民文化祭」の対象事業とはならなかったが、活動人員不足に窮していた MAP も4年生を中心にアートプロジェクトサークルとしての意地を見せ、学園祭期間中、独自の展示を行なった。筆者の企画アイデアをもとにした「自動出会い販売機」というワークショップ型の展示である。



（写真3）MAPの展示
「じどう であい はんばいき」

写真のような自動販売機を制作し、来場者が10円を入ると、中から手作りのカプセル型ペンダントが1つ出てくる仕組みである。このカプセルには様々な顔の表情があるが、同じ表情のものがペアで1組ずつあり、これを首からぶら下げて学園祭の会場を歩くことで、同じ顔のペンダントをした人と出会ったら、この自動販売機のところに2人で帰ってきて、めでたく写真を撮るという流れになっている。

見知らぬ人との出会いの楽しみを演出するというコミュニケーション型のワークショップは、サークルとしても初めての取り組みであったが、写真4の様に、多くの「出会い」を楽しんでもらえたようである。

活動人員不足の中、それでもこのような活動をやり遂げた MAP の4年生は、前年度、奈義町や美作市でのアートプロジェクトを経験した学生たちであり、事後の意識調査でも意



（写真4）「じどう であい はんばいき」での「出会い」

欲的な回答を寄せていた学生である。地域の芸術文化活動に関わる中で感じた楽しさや達成感が、活動困難な状況の中でも積極的な行動に向かわせたのではないかと考える。

5 情報の提供と活動への参加

地域のアートプロジェクトへの学生の参加を促すためには、学生への情報提供を効果的に行なうことの重要性が、昨年度の意識調査の結果からも窺い知ることができた。以前から、美術館の展示案内等は、学生ロビーに置き、誰でも自由に持ち帰ることができるようにはなっているが、アートイベントやアートに関連するワークショップ等の告知は、興味や関心がない者にまで積極的に告知することもできず、なかなか難しい。そこで、サークルや授業等で興味や関心のありそうな学生を見つけて、そうしたイベントやワークショップを紹介するにとどまっている。

今年度、児童文化研究部が、「おかやま県民文化祭地域フェスティバル」に関わる企画を行ったことをきっかけにして、所属する学生へも部長を通じて、アートに関する情報を伝えることができるようになった。昨年度の意識調査で、児童文化研究部では、「地域で行なわれる美術活動に関心があるか。」という質問に対して、「あり」と答えた学生が48%、「どちらでもない」と答えた学生が40%であった。関心を持っている学生が半数近くいる上に、的確に情報を提供すれば関心を示すかもしれない学生が相当数いるのではないかと考えた。また、特にサークルの性質上、子どもとアートに関連した分野での情報を提供することで、より関心度は高まるはずである。

そこで、平成26年3月1日から丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川県）で開催された「あそびのつくりかた」展³⁾の鑑賞を呼びかけることにした。この展覧会は、子どもから大

人まで楽しめるように企画された、参加体験型の展覧会である。河井美咲、小沢剛、梅田哲也、クワクボリョウタの4人の作家によるそれぞれの作品は、作品の感触を手で触って確かめたり、着たり（河井）、布団の山に登ったり（小沢）と、従来の美術鑑賞の概念を覆すものである。

呼びかけに応じて3月23日、児童文化研究部の部員6名が、日帰りの鑑賞ツアーに参加した。以下の感想にもあるが、初体験の体験型アートは、非常に刺激的で、有意義な経験となったようである。



(写真5) 丸亀市猪熊弦一郎美術館



(写真6) 河井美咲「アーティ」⁴⁾



(写真7)

小沢剛「あなたが誰かを好きなように、誰もが誰かを好き」⁵⁾

◎ 鑑賞後のアンケートより

- ・観て楽しむだけでなく、体験型のアートは初めてだったので、とても新しかったし、楽しかったです。布団の山のアートは実際に登ることができ、子どもの目線でも楽しめるアートだなととても感動しました。
- ・今回のような「あそび」というテーマは、教育者を目指す人にとって、とても興味深く、是非行ってみたいと思い参加しました。学生に関係のあるテーマから美術というものに触れていたら、より身近に感じられるのではないかと思います。
- ・児童学科であれば、今回のように鑑賞することで、子どもに関することを学べるという内容であれば、とても興味がわくのではないかと思います。
- ・今回自分たちが観てきたことを他の部員に話したい。またこのような機会があれば、情報をいただければ、有り難いと思いました。
- ・芸術が、仕事をする上でどのような役に立つかを学ぶ必要がある。

今回の参加者は、児童学科の学生だったので、それぞれの作品を子どもの目線で見たり、体験したりしたようである。

6 おわりに

2年間の実践を通して、地域貢献につながる芸術文化活動への学生の参加は、十分な成果が上がったとは言い難い。確かに参加した学生の意識や意欲は向上したが、その輪を広げ、多くの学生の参加を呼び込むことはできなかった。

学内の文化系サークルの動向を見ても、音楽やダンス系サークルへの入部者が多い中、美術系サークルへの入部者は少数である。しかし、決して潜在的な美術愛好者がいないわけではなく、もっと多様な方法で探索したり、企画の告知をしたりすれば、地域のアートプロジェクトに関心を示す学生もいるはずである。

実際に、今回の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館での鑑賞体験をきっかけにして、その後、地元の展示施設で行なわれたジオラマ作りのボランティアに積極的に参加した学生もいた。情報提供の困難さについては前述したが、むしろ頻繁に告知を行なうよりも、時間はかかっても日々の授業や学内行事を通して、ものづくりの楽しさやアートの面白さなどを体験さ

せることに注力することが大事なかもしれない。それは、例えばモノの見方や美術の枠を広げるような授業であったり、様々な造形的な表現技法を体験させることであったり、本学の特色である「食」「子ども」「福祉」とアートを絡めた授業であったり、工夫する余地はまだまだあるだろう。

この度の実践研究をもとに、これからも学生が、アートを介して地域貢献に一步踏み出せるようなきっかけづくりを、考えていきたい。

註

1) 『広辞苑』第6版

2) 前掲書 1)

3) 会期 2014年3月1日から6月1日

展覧会カタログの主催者挨拶には、「(前略)心も身体もと
きはぐし、ワクワクすること。作品は遊具ではなく柔軟な心
をもたらし媒体となります。本展を通じて、あそびを創り出
すことや、精神の技術につながるヒントを見つけていただい
れば幸いです。(後略)」と記されている。

4) 布、ウレタンフォーム、木による

サイズ 450×600×65

大型の櫛や手で表面を撫でることによって、感触や毛の動
きを楽しむことができる。なお、本展覧会は作品の撮影も自
由に行うことができた。

5) ミクストメディア サイズ可変

100枚の布団で構成された山には、自由に登ることができ
る。また、下部は空洞になってくぐり抜けることもでき
る。さらに、山の上にポストがあり、子ども限定ではあるが、
好きな絵を描いてポストに入れると、見知らぬ誰かからの絵
はがきが受け取れる仕組みのワークショップも行なわれた。